

出處の意識について——權德輿の場合——

岡 本 洋 之 介

はじめに

權德輿（七五九～八一四）は、建中年間から貞元初期にかけて、江南江西で使職の幕僚に就いたり離職したりの日々を送っていた。貞元七年（七九一）、三十四歳の時に、淮南節度使杜佑、江西觀察使裴胄の両者に辟召される。許可を得るべく送られた上表が同じ日に都へ届いた。これが德宗の目にとまり太常博士を拜命し上京することとなる。その後中央において順調に出世し、元和五年（八一〇）には宰相に就任した。權德輿は貢舉に及第してはいない。門閥の出でもない。令外官である幕職を振り出しに科第を経ることもなく中央政界入りし位人臣を極めた、寒門出身の士大夫である。

江南時期における權德輿は、官にあることと隠棲すること、どちらの道をゆくか絶えず思い悩んでいた。そして中央で官を得て後、自身がその兩極の中間に位置していることに氣付き、それが本來の願いであつたと詩にうたう。官か隠かという二者擇一から抜け出し、その雙方を兼ね備えた處世を我がものとするまでの權德輿の内面の變化は、大變興味深い。

本論では權德輿の出處に對する意識を探る。特に詩を中心に考えの變遷を追つた。この作業によつて、佛教への傾斜①、妻への愛情②、詩作の傾向③を述べた先行研究とはまた異なる一面を垣間

見ることができるであろう。そして同時に、中唐の士大夫における出處の意識の一例を示すことともなる。

詩文の底本には『四部叢刊』所收『權載之文集』を用いた。以下『文集』と略記する時はこれを目指す。校訂作業には『文集』卷末の校補、『宋蜀刻本唐人集叢刊』所收『新刊權載之文集』（卷一、八、卷二十一、三十一）、臺灣國立中央圖書館藏『權載之文集』（卷四十三、五十）、霍旭東氏の校點本『權德輿詩集』『權德輿文集』^④で指摘されている他書との異同考證、『全唐文新編』、以上の六資料を用いた。また、權德輿の動向や詩文の繫年については、蔣寅氏の著作『大曆詩人研究・下編』^⑤の第八章〈權德輿年譜略稿〉及び第九章〈權德輿作品繫年〉、中原健二氏の論文〈權德輿年譜初稿〉^⑥を一つの指標とした。

1

建中元年（七八〇）二十二歳の時に淮西淮南等道黜陟使韓洄の屬僚となり官界へ足を踏み入れるまで、若かりし頃、未仕官の權德輿は出處についてどのような思いを持っていたのか。貞元十八年（八〇二）に書かれた「送右龍武鄭錄事東遊序」（『文集』卷三十八）に、二十歳の時分を振り返った記述がある^⑦。それによれば、「黨塾」、いわゆる私學に通い、なにがしかの人物に師事していたという。州學や縣學など官立の教育機關ではない、私學所屬の者は、禮部試に應じる前に、まづ州縣の長官が掌る鄉試を経て選拔されねばならない。無論受験勉強だけに専心していたわけではなからうが、權德輿も科第に向け勵む一人であったと推察される。

「寓興」（『文集』卷一）はその頃に詠まれた詩である。起句で「弱冠 就^なす所無し」、結句で「吾將に秋旻に問わんとす」と言う。權德輿二十歳、大曆十三年（七七八）秋の作である。「百憂

一身に鍾まる」と多くの憂いを抱えていることを述べ、その中の一つとして仕官や貧窮に言及する。

昭代未通籍 昭代 未だ籍を通ぜず

8 豐年猶食貧 豐年 猶お貧を食す

この麗しき御世に朝廷へ出仕しているわけでもない。それどころか豐作の年ですら貧しい暮らしのまま。「通籍」とは、通行可能な者の名札が宮中の門に掛けられていた漢代のならわしに基づく語で、轉じて官を得て出仕するという意味で用いられる⁽⁸⁾。權徳輿がいまだ仕官を果たしていない點を憂えるのは、「邦に道有らば貧にして且つ賤しきは恥なり、邦に道無くして富み且つ貴きは恥なり」と、政がよく治まっていれば仕官するのが君子であるとした、『論語』泰伯篇のくだりに基づく認識によるであろう。儒の道にかなない善政の布かれた世であるのに貧しく身分が低い。それは士大夫として恥ずかしく憂うべきことであつた。

豈伊當途者 豈伊に當途者の

14 一一由中人 一一 中人に由らん

已矣勿復言 已んぬるかな 復た言う勿れ

15 吾將問秋旻 吾將に秋旻に問わんとす

「豈伊に當途者の 一一中人に由らん」とは、曹植の「當塙欲高行」詩に「龍天に升らんとするに浮雲を須^まち 人の仕進するに中人を待たん」とあるのを典故とする⁽⁹⁾。龍は天に昇るに雲を待つ、人は官を得るに仲立ちする者を待つ、と曹植はうたった。權徳輿には手助けをしてくれるその援助者がいない。しかし官界で榮達を遂げる者一人一人がみな助力してくれる相手を持つわけでは

あるまい、そうでなくともものぼっていけるさ。もうよそう、そういうことを口にするのは。權徳輿は黙って秋空に問いを向ける。今の自分は官を得て朝廷へ出仕している身ではない。暮らしも貧しい。後押ししてくれる者も持っておらぬ。だが官途へ乗り出してゆける希望はあるはず。權徳輿は貧しい暮らしの中、仕官への希望を胸に宿していた。

「自咎（自らを咎む）」（『文集』卷一）においてうたうのも同じ内容である。正確な製作年はわからない。ただし、自身の貧しい境遇をうたうため江南時期の作と見るのが妥當である。その中で「清時 名は未だ立たず 稔歲 室は猶お空し」と、よい治世であるのに世に出ておらず、實り豊かな年なのに部屋の中は今なお空っぽだとうたっている。「寓興」で「昭代 未だ籍を通ぜず 豐年 猶お食は貧し」と言ったところと同種の憂いである。「清時名未立」とは、綦母潜の「送章彝下第（章彝の下第するを送る）」詩で「三十にして名未だ立たず、君還た寸陰を惜しめ」と述べ下第を「名未だ立たず」と表現する點から考えれば、貢舉に及第していないことをうたっている。桂に慙じ鴻を羨む點を見ても、やはり及第を果たしていないことを氣に病んでいる。早鴻すなわち避寒南來の雁も、秋にふさわしい情景の一片である。しかし單なる敘景ではない。實景を借りた比喩である。唐代、桂が貢舉及第の象徴として詩文に登場するようになったことは山之内正彦氏の論考に詳しい¹⁾。花香る桂は科第した者に喩えられる。しかし自らはさにあらず。それを恥ずかしく思う。吏部試も含め貢舉に受ければ官に任命される。だが自身はそこに手が届かず恥じ羨むばかり。それは官として立ちたい權徳輿の思いの裏返しであつたと言えよう。

建中元年（七八〇）、權徳輿は黜陟使韓洄の幕下に辟召された。これが初任官である。ただ韓洄は任命後ほどなく別の官へ遷り現地へ赴任しなかったので、權徳輿が實際に職務に攜わるようにな

ったのは江淮水陸運使杜佑の幕に入ってからのことである。その杜佑も建中二年（七八一）十一月に江淮水陸運使を離任。權德輿も離職する。

官について後、權德輿の出處に對する意識に變化が現れる。官としてあることへの願望は薄れ、隱棲への憧れを述べるようになる。「自楊子歸丹陽初遂閒居呈惠公（楊子より丹陽に歸りて初めて閒居を遂げ聊か惠公に呈す）」（『文集』卷三）は、杜佑のもとを離れ、丹陽のわが家へ歸つてきた際の感慨をうたったものである。惠公とは權德輿と交流のあつた僧である。具體的に誰を指すのかは未詳。詩中、權德輿は次のように述懐する。

稍知名是累 稍や知る 名は是れ累なるを

4日與靜相歡 日び靜けさと相い歡ぶ

名聲名譽とはわずらわしいものと認め、日常の安寧靜謐さに喜びを感じている點は注目し値する。官になく困窮を訴えた未仕官の時分の姿とは明らかに異なる出處のとらえ方である。五六句目では「蹇淺 機に逢うは少なく 迂疎 物に應ずるは難し」と、自身の淺はかさゆえに機會にめぐり逢うことが少なく、回りくどくて物事への對應が下手であると、謙遜含みで自己評價している。幕職における實務は權德輿の肌に合わなかつたのであろう。役人勤めは權德輿の意識に影響をもたらしていた。

官への志向の鈍化は、「侍從遊後湖讌望（侍從し後湖に遊び讌望す）」（『文集』卷一）に一層はつきりと現れている。この詩は母の誕生祝いに一家で遊びに出かけた様子をうたったものである。權德輿が「家人」の語を用いる時はほぼ妻崔氏を指し、母李氏は貞元四年に亡くなっている點から推測すれば、貞元元年から四年までの間の作と考えられる。家族が楽しく過ごす様子を眺め周囲の景色をめつつ酒を飲む權德輿は、その胸中を次のように語る。

以茲心目暢 茲の心目の暢を以て

38 敵彼名利途 彼の名利の途に敵せん

輕肥何爲者 輕肥 何爲る者ぞ

40 漿藿自有餘 漿藿 自ら餘り有り

願銷區中累 願くは區中の累を銷し

42 保此湖上居 此の湖上の居を保たん

無用誠自適 無用 誠に自適し

44 年年翫芙蕖 年年 芙蕖を翫ぜん

こういったのびやかさはあの名聲利益を追いかけける官途に匹敵する。豊かな暮らしが何だ。粗食とはいえ餘裕もある。狭い世間での煩わしさなど消し去って湖そばの住まいをまもっていたものだ。才乏しい自分は心のままに暮らし毎年こういう具合に蓮の花を愛でるとしよう。豊かでもなくとも家族と共に楽しく過ごしていられる穏やかな暮らしを續けたい。ここでの權徳輿は、官人としてあることよりも隱棲することに高い價值を認め、その境遇を積極的に求めている。ひとたび役人として過ごした後は静かな暮らしを願うようになったのである。言い換えれば、權徳輿にとって自身が隱棲することは、すでに仕官と同等の意義を持つものとして意識されているのである。

同様の思いは、貞元二年に詠まれた「丙寅歲苦貧戲題（丙寅の歲貧に苦しみ戲れに題す）」（『文集』卷一）にも見える。この前年、權徳輿は崔氏を妻に迎えた。また、この詩を詠んだ時點では野に下っていた。詩では冒頭から生活の貧しさをつづる。そしてその貧しさに意氣消沈してしまふ自分が、貧しさを意に介さなかったかつての賢人におよばぬことを歎いた後、次の如く續け

る。

奈何時風扇 奈何せん 時風 扇りて

26 使我正性衰 我が正性をして衰えしむるを

巧智競憂勞 巧智 憂勞を競い

28 展轉生澆漓 展轉として澆漓を生めり

世間の雰圍氣にあおられ、士大夫としての本來の姿を力弱らせてしまう。上手くやろうと知恵を働かせることがさらに憂いをかきたてる。役人として官途にあれば情の薄さが生じる。生活の困窮のみならず、世の中の流れや自分の行動が自身を悪い方へ悪い方へと押しやっていく。ゆえに以下のように思うのである。

吾觀黃金印 吾 黃金の印を觀るに

30 未勝青松枝 未だ青松の枝に勝らずと

粗令有魚菽 粗ば魚菽を有らしむれば

32 豈復求輕肥 豈に復た輕肥を求めん

印章を攜える役人生活は青々とした松を愛でる田園生活に劣る。祭祀用の供え物を用意できるのであればそれ以上の富貴を求めはしない。權徳輿のこの言葉は、「自楊子歸丹陽初遂閒居呈惠公」「侍從遊後湖讌望」に見えた述懐よりもなお端的である。官になくともよい。富もいらぬ。それは名利追求の放棄、官としてあることの放棄に他ならない。もはや隱棲することが權徳輿の願いとなったかのようである。未任官を歎息してしようと幕職ながらも官にあらうと、權家の貧しさは變わらない。しかし、その現状に對する權徳輿の受けとめ方は變化している。役人勤めに伴い生じる

諸々の煩わしさを厭い、同時に、静かで質素な暮らしの好ましい面に目が向くようになったのである。

ではただちに退隱一筋の生活に入るかというと、權徳輿はそこまで踏み込んでいくことができない。「浩歌」（『文集』卷一）は、世に出るか出ないか、名聲利益を追うのか静かな暮らしを送るのか、迷い憂える胸中を主題とした詩である。「羈羸」（なにもものかによる束縛）に言及しており、この詩は任官後の作と考えられる。ただ正確な製作年はわからない。

權徳輿の住まいは丹陽の練湖の近く、閑静な環境のもとに在った。散策に出て周囲の敘景を十句目まで續けた後、心中を吐露する。

我心獨何爲　我が心　獨り何をか爲さん

12 萬慮縈中腸　萬慮　中腸を縈る

履道身未泰　道を履めども身は未だ泰からず

14 主家謀不臧　家を主^{おさ}むれども謀は臧^よからず

心爲世教牽　心は世教に牽かれ

16 跡寄翰墨場　跡は翰墨の場に寄せん

私の心はどうにもならぬ。さまざまな思いがはらわたを驅けめぐる。正道を歩んでいても一身は安泰ではない。家を取り仕切っても上手いかない。思いは士大夫の踏むべき教えに影響を受けるし、文學の腕を振るう場に己の足跡を残したい。權徳輿は野にある生活を求めるようになった。だがやはり官僚として世にあることを捨てきれない。士大夫は政治の場に出るものである。詩文を事とする者は文學でもって我が名を高からしめたいのである。

出處兩未定 出處 兩つながら未だ定まらず

18 羈羸空自傷 羈羸 空自むなしく傷む

沈憂不可裁 沈憂 裁すべからず

20 佇立河之梁 河の梁に佇立す

仕官するとも隠棲するとも定まらず、繋がれ自由にならず悲歎する。世に出るか退隱するかを定めきれぬまま橋の上にたたずむ。對極にある二つの道、官と隱、どちらへゆくのか權德輿は明示しない。いや、できない。貧しくとも家族とともに野にあらうと思う。しかし官たることも諦められない。決斷できず、立ちつくす。

ただ、權德輿のその思いとは別なところに、役人勤めを迫られる理由が存在した。貞元三年、李兼の幕下にあつて家を離れていた時分に、妻へ宛てた詩「祇役江西路上以詩代書寄内（江西に祇役し路上にて詩を以て書に代え内に寄す）」（『文集』卷十）で、その點に言及している。

宦遊豈云愜 宦遊 豈にこころよ愜しと云わんや

10 歸夢無復數 歸夢 復た數うる無し

幕職にあつて奔命する自らの境遇を「宦遊」と表現する。使職の下僚としてあることなど、愉快であると言えたものではない。數えきれないほどいつもいつもわが家へ歸ることを夢に見ている。權德輿にとっての「宦遊」はもはや己が本意に非ざる狀況、負の方向のやつかいごとでしかなかった。

既非大川楫 既に大川の楫に非ざれば

26 則守南山霧 則ち南山の霧を守らん

胡爲出處間 胡爲すれど出處の間に

28 徒使名利汚 徒らに名利をして汚さしめん

羈孤望予祿 羈孤 予の祿を望む

30 孩稚待我舗 孩稚 我が舗を待てり

自分は人の助けとなるような才能の持ち主ではないのだから隠棲しようと思う⁽¹⁾。仕官と隠棲との間に名聲利益を追いかけ我が身を汚したりはしない。しかし自分は官に就く。何故か。子供が腹をすかせて待っているからだ。ゆえに自らの思いはひとまず置かねばならぬ。權徳輿は「侍從遊後湖譙望」や「丙寅歲苦貧戲題」で見られた以上に強く隠棲に惹かれてゐる。「名利」にまみれたくはないとも言う。しかし、憂えて橋の上にたたずもうと望みに違ふことになるうと、一家を食わせるためには仕官する道を選ばねばならないのである。

以上見てきたように、江南時期の權徳輿は官途にあるのか隠棲するのか、その選擇に悩み續けていた。野にあれば官にあることを望む言葉も吐く。仕官後は隠棲への思いを強調するようにもなる。しかしながら生活の窮乏ゆえに隠棲をつらぬくわけにもいかず、官にあることを選ばざるを得ない。それがまた隠棲への憧れをより一層色濃くさせ、苦惱の深化を助長する。權徳輿は憂いの惡循環に陥っていた。

2

自身の希望とは別に、生活を支えるため官にあらねばならず、仕官と隠棲の狭間で身を定めかねていたその状況は、貞元七年（七九一）秋、中央より太常博士に任じられたことで一變する。翌年

初頭には都の土を踏んだ。都へのぼって以後の權德輿は、生活の貧しさや出處の苦しみを詩にうたわなくなる。中央に官を得たことによる經濟的壓迫からの脱出が詩作に影響を與えたことは想像に難くない。六十歳で病に斃れるまで官にあり続け、仕官への希望は十分に満たされる結果を得るのである。では、隱棲への思いはどのような決着を見たのであろうか。

都へのぼって以降、長安時期の權德輿の出處に對する意識にはさらなる變化が認められる。「寄臨海郡崔曄璋（臨海郡の崔曄璋に寄す）」（『文集』卷三）は臺州錄事參軍として任地にある崔曄璋へ寄せた詩である。赴任に際しては「送臺州崔錄事」（『文集』卷五）という詩を贈っており、「送臺州崔錄事二十三丈赴官序」（『文集』卷三十七）という序文も記した。それによれば、崔曄璋は權德輿の舅である崔造の一族に連なる者で、權德輿が都へのぼって來たばかりの頃、同里に住んでいたという^{〔1〕}。下級官僚として臺州で過ごす崔曄璋の生活に思いをはせて權德輿はうたう。

美酒歩兵廚 美酒 歩兵の廚

2 古人嘗宦遊 古人 嘗て宦遊す

かつて阮籍は歩兵校尉の役職に就いた。役所にあつた酒を求めてという理由ではあつたにせよ、かの阮籍も「宦遊」した一人であつた^{〔2〕}。「宦遊」という言葉が、唐代には下級官僚が地方官として任地を轉々とせざるを得ない悲哀を内包するようになることは、川合康三氏の論文「宦遊と吏隱」に詳しい^{〔3〕}。權德輿は崔曄璋を阮籍と重ね、さらには、遠隔地への赴任は役人としてあれば生じるもので、あなた一人に起こった特殊な狀況ではなく、古來より普遍的なことであるといたわる。

吏隱豐暇日 吏隱 暇日豊かにして

6 琴壺共冥搜 琴壺 冥搜と共にす

そして五六句目においてその境遇を「吏隠」と稱した上で、手持ち無沙汰な日々を送り、琴を彈き奏で酒を飲み、奥深いものを探求しておられましよう⁽¹⁶⁾、と察する。權德輿が用いた「吏隠」は、仕官による經濟的餘裕と隱棲による精神の安寧を同時に實現することを指す事象として、先に舉げた川合氏の論文をはじめ多くの先行研究が解明に努めるところである⁽¹⁷⁾。この詩で權德輿が崔禪璋の境遇を「吏隠」と評したのも、地方への赴任には負の要素ばかりではなく、我が身に益となる事柄もあることをほのめかす、知人への慰めを含んだ言葉であつたらう。

權德輿は都にのぼった直後の貞元八年五月に太常博士から左補闕となる。その頃、城門郎であつた李某が退官し鄒陽へ歸るのを見送つた詩「送李城門罷官歸嵩陽」(『文集』卷五)で次のようにうたう。

與君相識處 君と相い識る處

2 吏隠在牆東 吏隠して牆東に在り

詩題の自注に「城門院は遺補院の東に在り」とあり、ここの「牆東」は、直接には城門を司る役所を指す。李某は權德輿が詰めていた左補闕の役所の東に勤務していたのである。ただし、單に役所の位置關係を表すだけではない。『後漢書』逢萌傳に見える故事、王君公が亂に遭遇しても逃げることなく逆に牛飼いをして身を隠したところ、當時の人が「世を牆東に避く王君公」と評したところ⁽¹⁸⁾を絡ませている。知りあつた時、あなたは王君公の如く「吏隠」しておいででした、と相手を稱揚しているのである。李某がそもそも誰であるのか判然とせず事跡も追えない。しかし、官にありながらも王君公にたとえるに足る李某の姿が、權德輿をして「吏隠」と言わしめた。江南時期の權德輿が「名は是れ累」と官僚生活を億劫なものに思い、「吾黄金の印を觀るに 未だ青松の枝に勝らず」と仕官より隱棲を高い位置にとらえ、「宦遊 豈に 愜^{こたへ}しと云わんや」と役務に走り

回る自身の境遇を「宦遊」と表現しかつ厭うていたことは前述した。いずれも官にあることを望まず隠棲に價值を認めた言葉である。しかし長安時期の權徳輿は、役人生活の中に隠棲を溶け込ませた「吏隱」という處世、官か隱かという對立した考え方ではなく官にありつつ隠棲を實現する、いわば折衷併存というあり方が意識にのぼっていることに氣付く。ただしそれは他者の身の處し方を描寫する中に現れた變化である。自分自身が同じ狀況になった時、權徳輿はどう表現しているのか。

「退朝」と詩中でうたうことから、都へのぼって以後に詠まれたと判斷される「竹逕偶然作（『文集』卷一）」においては次のようにつづっている。

退朝此休沐 朝より退き此に休沐す

2 閉戸無塵氣 戸を閉ざせば塵氣無し

權徳輿は朝廷へ出仕している身。しかし休暇に際して門を閉ざせば、そこは俗塵の見當たらぬ空間となる。外界との接觸を遮斷し、權徳輿は庭を散策する。「策を支き幽逕に入れば 清風 此の君に隨う」と、杖を片手に小徑に歩みを進め、竹林の間を抜ける清かな風を受ける。あるいは「琴觴 恣に偃傲し 蘭蕙 相い氛氲たり」と、蘭や蕙が香りをふりまく中で琴をかなで杯を傾け、氣ままに身體を横たえる。そしてそのくつろぎは、

幽賞方自適 幽賞 方に自適す

8 林西烟景曛 林西 烟景曛し

と述べるように、心になつたものであつた。遁世の雰圍氣を楽しむその時間と空間とに、權徳輿は心滿たされる思いであつた。官としての立場を放棄し隠棲を求めなくとも、自邸に閉じこもればそこは退隱を實現する境地となるのである。江南時期、出處について一方に身を置こうとして苦し

んでいた。官を選べば隱棲の希望は果たされなかった。隱棲すれば家族が食ってゆけず、官を選ばざるを得なかった。それがこの詩では、在官の身ながら隱棲を味わい、心の満足を得ている自身を描寫している。仕官と隱棲を同時に我がものとすることに成功しているのである。

そして小さな轉機が訪れる。元和二年（八〇七）、四十九歳の權德輿は吏部侍郎から太子賓客へ遷った。部下の失敗が原因で轉出を餘儀なくされたと本傳は傳える⁽¹⁾。職事官の位階は後者の方が高い。しかし吏部侍郎は政治の中樞にある。翻つて太子賓客は東宮職でしかない。内實は閑職であり、いわば第一線からの後退、左降であつた。翌年には兵部侍郎となつて再び激務の中へ戻ることになるものの、權德輿の出處に對する意識は、この異動をきっかけとしてさらに退隱へ向けて深みを増したように思われる。たとえば官職が吏部侍郎から太子賓客へ遷つたと詩中で觸れている詩「南亭晚坐因以示瓌」（『文集』卷一）⁽²⁾は冒頭、

隱几日無事 隱几 日び事無し

2 風交松桂枝 風は松桂の枝に交わる

とうたいだす。仕事に追われもせず何事もなく過ごす日々。風は松や桂の間を抜けてゆく。安閑とした現況の描寫に續き、

跡似南山隱 跡は南山に隱るるが似く

6 官從小宰移 官は小宰從り移る

と、小宰から配轉されたことを言う。この小宰とは吏部侍郎を指す⁽³⁾。遷つた官職は前述したように太子賓客である。また、ここでいう「南山隱」とは、「祇役江西路上以詩代書寄内」において「南山霧」と見えるのと同様の故事を下敷きとし、隱棲することを指す。東宮職である太子賓客への轉任は、朝廷における實務のラインから外れてしまうことに他ならない。そして太子賓客の職に

あることを南山に隠れ棲むかのようにだと表現する。つまり、閑職にあることと隠棲との間に類似性を認めているのである。在官のままで退隠したかの如き趣を感じ詩中に表す点には、やはり注意を拂つて然るべきであろう。都へのぼつて後、權德輿は官と隱の併存の實現を他者に見出し「吏隱」と捉えるようになった。さらにこの詩では自身における官と隱の兩立に氣づいている。江南時期、仕官か隱棲かの擇一に搖れた權德輿にとつて、「在官のまま隱棲しているかのよう」という状態は、「出」「處」の雙方を兼ね備えた理想的な身の置き所であつたと言えるのではないか。

同様の事柄は「酬南園新亭宴會璩新第慰慶之作時任賓客（南園の新亭に宴會し璩の新たに第し慰め慶ぶの作に酬ゆ 時に賓客に任ぜらる）」（『文集』卷十）でもうたわれる。太子賓客任命後、南園の新亭にて宴會を催した際の作である。南園の具體的な場所はわからない。終南山を見はるかす長安郊外であろう。詩を「酬」いた相手は妻の崔氏である。二十六句目に「君の好音を流すを喜ぶ」とある。この宴において崔氏は息子の權璩の及第を喜ぶ詩を夫へ贈つた。この詩は權德輿からの妻への返詩である。

南亭煙景濃 南亭 煙景濃く

2 平視中南峰 平視す 中南の峰

官閒似休沐 官は閒して休沐の似し

4 盡室來相從 盡室 來たりて相い從う

日抱漢陰甕 日び抱く 漢陰の甕

6 或成蝴蝶夢 或いは成す 蝴蝶の夢

樹老欲連雲 樹は老いて雲に連ならんと欲し

8 竹深疑入洞 竹は深く洞に入るかと疑う

南園からは終南山を望むことができた。太子賓客は閑職であり勤務していてもまるで休暇の日であるかのよう。一家總出でここへやってきた。そうすることを知らないわけではないが、毎日あれこれ術策をめぐらすことをせず、ともすれば夢と現實とがあいまいな境地にいる。權德輿は太子賓客としてある日々を、莊子の逸話を下敷きにそう表現する²²⁰。やって來た南園は大きな樹木がそびえ竹林が山洞のようにこんもりと生い茂る、心地よい空間であった。一行は序列をわきまえた並びで席をしつらえた。話が弾み酒を酌み交わす。うたも飛び出し、家路につくことなど思いもよらぬ。月がのぼるまで過ぐすとしよう。宴の楽しいげな様子をひとしきり描寫し、詩を贈ってくれたかたわらの妻を顧みる。

好逑蘊明識 好逑 明識を蘊す

14 内顧多慚色 内に顧みれば慚色多し

不厭梁鴻貧 梁鴻の貧を厭わず

16 常譏伯宗直 常に伯宗の直を譏る

予婿信時英 予の婿 信に時英たり

18 諫垣金玉聲 諫垣 金玉の聲

男兒纔弱冠 男兒 纔かに弱冠

20 射策幸成名 射策 幸いにして名を成せり

自分のつれあいは知識を蓄えた才女。胸に手を當て自問してみればすまなく思うことも多い。梁鴻の妻のように貧しい生活であっても自分に連れ添い、伯宗の妻のように常々諫めてくれた²²³。

娘の婿である獨孤郁は諫官として朝廷に上がっている時代の俊秀。長男權璩は二十歳にして及第を

果たした。

偃放斯自足 偃放し斯に自足す

22 翛然去營欲 翛然として營欲を去らん

散木固無堪 散木 固より堪うる無し

24 虚舟常任觸 虚舟 常に觸るるに任す

寢轉がつて身體をのばし充分な満足を覺える。何物にもとらわれずおり、欲をかくのはやめにしよう。役に立たない自分は最初から何ら負託にこたえられぬ存在。しかし空舟のように中身のない人間であれば、誰にぶつかつたつて咎めだてされやしないさ。ここでも『莊子』を典故に心中を語る⁽²²⁾。子供らの世代は順調に士大夫としての道を歩んでいる。自分は激務から遠ざかり、役職にありながらまるで隠棲しているかのように。心からほつとした權徳輿の様子が詩の間からにじみ出るかのような言葉が續く。そして、この境地こそ自分の理想であつたと詩は締めくくられる。

大隱本吾心 大隱は本と吾が心

26 喜君流好音 君の好音を流すを喜ぶ

相期懸車歲 相い期す 懸車の歲には

28 此地即中林 此の地即ち中林ならんと

朝廷に役人としてあり人聲喧しい市井に身を隠す處世、そういった境遇はもとと心に抱いていた願ひ。こうして君がよい詩を贈ってくれることがとても嬉しい。君に約束しよう、官を引退した曉にはここが我々の隠棲地になる、と。ここで權徳輿が言う「大隱」とは、王康琚の「反招隱詩」に「小隱は陵藪に隠れ 大隱は朝市に隠る」と見える「大隱」を下敷きとしている⁽²³⁾。人知れない

静かな空間への遁世は小隠である。官界や市井のあれこれ喧しい中に身を隠す、それは大隠である。朝廷や巷間にあつて周圍に流され染まることなく身を保つのは難しい。ゆえに後者がより高い価値を持つ。權徳輿は太子賓客に任じられた。閑職である。それは隱棲に等しい。「朝市に隠れ」た状態である。よつて權徳輿は「大隠」と重なることを言い、それは「本と吾が心」であると述べるのである。そこには、仕官か隱棲か、どちらの道へゆくか定めかね懊惱していた江南時期の權徳輿の姿はない。

權徳輿は「新月與兒女夜坐聽琴舉酒（新月に兒女と夜に坐し琴を聽き酒を舉ぐ）」（『文集』卷十）においても「大隠」と詩に詠む。詩中に成人した子供たちと幼い孫が登場することから、前掲の「酬南園新亭宴會璩新第慰慶之作時任賓客」と同時期もしくはそれ以後の作であろうと思われる。満月が地平からのぼつた夜、權徳輿は妻の奏でる琴を聽きながら酒を飲んでゐる。

列坐屏輕簾 列坐し輕簾を屏し

6 放懷絃素琴 放懷し素琴を絃く

兒女各冠笄 兒女 各おの冠笄し

8 孫孩遠衣襟 孫孩 衣襟を遠る

乃知大隠趣 乃ち知る 大隠の趣の

10 宛若滄洲心 宛かも滄洲の心の若きを

ここでの「大隠」も前述の例と同じ方向の意を含んでうたわれている。どの官にある時の作かは判然としない。しかし、家族とともにくつろぐその時間に隱棲の氣色を覺えている。しかもそれが「滄洲の心」と同じであると述べている。かつて謝朓は「之宣城出新林浦向版橋（宣城に之くに新

林浦を出で版橋に向う」詩に「既に祿を懷うの情を懼ばしめ、復た滄洲の趣に協う」と詠んだ²。俸祿を賜り經濟面での心配がないことを喜び、地方官としての赴任を隱者の住まう地へ行くかのように比喻し退隱の思いに合致するという謝朓の述懷を、權德輿は典故として用いたのである。家族は並んで座っている。妻はその胸の内を音に溶かして琴をかなでている。子らはもう成人した。孫たちは服やら襟やらにまとわりつく。この情景、このひととき、こうした時間を持つていられる「大隱」の風情は隱遁のそれとそっくりではないか。その快さを「乃ち知る 大隱の趣の 宛かも滄洲の心の若きを」と描寫した瞬間、權德輿にとつての「大隱」は隱棲と等しい價值を有することとなった。江南時期に苦しんだ仕官か隱棲かという二者擇一は、その雙方を兼ねた形で實現を見たのである。

まとめとして

權德輿は未仕官の頃には官途を望んでいた。しかし仕官して以後は隱棲へ心を寄せるようになった。官にあつて心身をすり減らすことを厭うたのである。とはいえ、仕官と隱棲のいずれの道をゆくか決めかねてもいた。しかし結局は生活や家族のため官にあることを餘儀なくされる江南時期であつた。中央官に拔擢された後は亡くなるまで官職にあり續ける。また、官にありながら隱棲の境地をも同時に有する處世を「吏隱」と表現し、併存が成り立つことを意識するようになる。そして閑職へ回されたのを機に、自身の置かれた状況は王康琚の言う「大隱」と同じであるとうたい、これぞ本来の願いであつたと述懷した。それは江南時期に「出」「處」の對立に搖れた權德輿の、處世に對する意識の決着點であつた。

本論では權德輿の處世に對する意識の變化を取り舉げた。その中に見られた、廣義で言うところ

のいわゆる「吏隠」という考えは、中唐以降、士大夫の處世態度として頻々と現れる。權徳輿もまた仕官と隱棲の兩立を成功させ、自身のその状態を「大隱」と稱した。それは、山野に隠れる「小隱」と朝市に隠れる「大隱」との中間に位置するとした「中隱」を我がものとした白居易の處世と、非常によく似たものである。高位ながら閑職である太子賓客分司東都就任を自ら願ひ出た白居易は、洛陽での閑靜な生活に精神の安寧を見出し、その状況を「中隱」と表現した。權徳輿は、出仕か隱遁かに搖れた時期を経て、在官のまま隱棲を實現したと實感するに到った。その間の意識の變化とたどりついた「大隱」の境地は、白居易の「中隱」よりも時期としてはやや早く芽生えたものである。權徳輿の言う「大隱」や白居易の言う「中隱」という處世は、無論、個人の志向や經歷を織り込んだ上で實現を見たものである。しかし、從來のような官か隱かという選擇ではなく、官と隱を兼ねた状態を求める意思表示が、貞元から元和にかけてという極めて接近した一時期に現れて來ることは、士大夫の出處に對する意識の變化を示唆するものとして注目してよいであろう。官にありながらも隱棲を實現できるととらえる感覺は、處世のあり方のひとつとして士大夫の間に形成されつつあったのではないだろうか。

（注）

- (1) 「權徳輿と佛教（一）」 河内昭圓 文藝論叢二十 P 二十五～三十六 一九八三
 (2) 「權徳輿の贈婦詩について」 河内昭圓 大谷學報六十三 P 四十三～五十九 一九八三
 「詩人と妻——中唐士大夫意識の一斷面」 中原健二 中國文學報四十七 P 六十四～一〇二 一九

- (3) 〈權德輿與貞元後期詩風〉 蔣寅 唐代文學研究第五輯 一九九四
『中唐詩壇の研究』 赤井益久 創文社 二〇〇四 第V部第四章 中唐の「意境說」をめぐる
- (4) 『權德輿文集』 霍旭東 甘肅人民出版社 一九九九
『權德輿詩集』 霍旭東 甘肅人民出版社 一九九四
- (5) 『大曆詩人研究 上編・下編』 中華書局 一九九五
- (6) 〈權德輿年譜初稿〉 中原健二 西北大學報(社科版) 第四期 P六十八〜七十八 一九九三
- (7) 予弱歲時、從師於黨塾。鄭生已用經術上第。(中略) 里閭僑居、年輩爲長。
- (8) 令從官給事宮司馬中者、得爲大父母父母兄弟通籍。(『漢書』卷九・元帝紀) 應劭の注に「籍者、爲二尺竹牒。記其年紀名字物色、縣之宮門。案省相應、乃得入也」と。
- (9) 龍欲升天須浮雲、人之仕進待中人。(『續古逸叢書』所收『曹子建集』卷六)
- (10) 『全唐詩』卷一三五
- (11) 「桂——唐詩におけるその〈意味〉」 山之内正彦 東洋文化研究所紀要八十八 一九八一 P七九〜一九六
- 「桂——唐詩におけるその〈意味〉補遺」 山之内正彦 東洋文化研究所紀要九十二 一九八三 P八三〜一四〇
- (12) 大川楫。川を渡るための手助けになる舟のかい。
古者聖王爲大川廣谷之不可濟、於是利爲舟楫。(『墨子』節用篇・中)
南山霧。南山に住む豹が身を隠した故事を隱棲に喩える。
南山有玄豹、霧雨七日而不下食者何也。欲以澤其毛而成文章也。故藏而遠害。(『列女傳』卷二)
夏四月、臨海郡紀綱掾崔稭璋、受命選部、出車東門。是歲、重表甥權德輿、始至京師、寓居同里。
(『文集』卷三十七・送臺州崔錄事二十三丈赴官序)
- (14) 聞步兵校尉缺、廚多美酒、營人善釀酒、求爲校尉、遂縱酒昏酣、遺落世事。(『三國志』卷二十一注

引『魏氏春秋』)

(15) 「官遊と吏隠」 川合康三 『中國讀書人の政治と文學』 林田愼之助博士古稀記念論集 創文社 P

二六一～二八一 二〇〇二

(16) 冥搜とは「幽冥」を「搜訪」すること。

非夫遠寄〇〇、篤信通神者、何肯遙想而存之。(『文選』卷十一・孫綽・遊天臺山賦)

李善注に「言非寄情遐遠、搜訪幽冥、篤信善道、通神感化者、何肯存之也」と。

(17) 主だったもののみ挙げる。

白居易における仕と隠 吉川忠夫 『白居易研究講座第一卷 白居易の文學と人生Ⅰ』 勉勵社 P

二〇六～二二二 一九九三

中唐詩人の隱逸思想―白居易の吏隠・眞隠― 西村富美子 『中國文學論叢』 平野顯照教授退休記念

P 一二五～一四二 一九九四

白居易の「中隠」思想について 胡山林 九州中國學會報三十五 P 一～十六 一九九七

(18) 『中唐詩壇の研究』 赤井益久 創文社 二〇〇四 第V部第一章 中唐における「吏隠」について

(王) 君公遭亂獨不去、僂牛自隱。時人謂之論曰、避世牆東王君公。(『後漢書』逢萌傳)

(19) 元和初、歷兵部吏部侍郎。坐郎吏誤用官闕、改太子賓客。(『舊唐書』卷一四八)

憲宗元和初、歷兵部侍郎。坐累、徙太子賓客。(『新唐書』卷一六五)

(20) 權璩は權德輿の息子。元和二年春に登第。

璩字大圭、德輿之子。元和二年登進士第。(『嘉定鎮江志』卷十八)

(21) 武則天の頃、六部を『周禮』の官制になぞらえた時期があった。

大唐武太后遂以吏部爲天官。(『通典』卷二十三・吏部尙書)

權德輿が詩に言う「小宰」とは、天官の次官であり、

治官之屬、大宰、卿一人。小宰、中大夫二人。(『周禮』天官冢宰)

ここでは吏部の次官である吏部侍郎の雅名として用いられている。また、唐代には次のような使用例もある。

門下小宰之官、久虛其位。（『文苑英華』卷三八七・孫逖・授陸景融吏部侍郎制）

(22) 『莊子』天地篇。子貢が漢陰の地で甕で水を汲み畑を潤している農夫を見て機械仕掛けを教える。しかし農夫はそこに物事をたくらむ心が生じるのを嫌って敢えて機械仕掛けを使っていないのだと返答する故事。

子貢南遊於楚、反於晉、過漢陰、見一丈人。方將爲圃畦、鑿隧而入井、抱甕而出灌、掬潑然用力甚多而見功寡。子貢曰、有械於此。一日浸百畦。用力甚寡而見功多。夫子不欲乎。爲圃者叩而視之曰、奈何。曰、鑿木爲機。後重前輕、挈水若抽、數如洗湯。其名爲槔。爲圃者忿然作色而笑曰、吾聞之吾師、有機械者必有機事、有機事者必有機心、機心存於胸中則純白不備、純白不備則神生不定。神生不定者、道之所不載也。吾非不知、羞而不爲也。

『莊子』齊物論篇。莊子が夢の中で蝶になった故事。

(23) 『後漢書』梁鴻傳。梁鴻の妻は夫とともに隠棲した。

女求作布衣麻屨、織作筐緝績之具。及嫁、始以裝飾入門。七日而鴻不荅。妻乃跪牀下請曰、竊聞夫子高義、簡斥數婦、妾亦偃蹇數夫矣。今而見擇、敢不請罪。鴻曰、吾欲裘褐之人、可與俱隱深山者爾。今乃衣綺縠、傅粉墨、豈鴻所願哉。妻曰、以觀夫子之志耳。妾自有隱居之服。乃更爲椎髻、著布衣、操作而前。鴻大喜曰、此眞梁鴻妻也。能奉我矣。

『左傳』成公十五年。晉の伯宗の妻が直言をよしとする夫を戒めた故事。

初、伯宗每朝、其妻必戒之曰、盜憎主人、民惡其上。子好直言。必及於難。

(24) 『莊子』人間世篇。巨木を見た匠石が、これは使いだの役に立たない木であると斷じた故事。

匠石之齊。至於曲轅、見櫟社樹。其大蔽數千牛、絮之百圍、其高臨山十仞而後有枝。其可以爲舟者旁十數。觀者如市。匠伯不顧、遂行不輟。弟子厭觀之、走及匠石曰、自吾執斧斤以隨夫子、未嘗見材如

此其美也。先生不肯視、行不輟、何邪。曰、已矣、勿言之矣。散木也。以爲舟則沈、以爲棺槨則速腐、以爲器則速毀、以爲門戶則液構、以爲柱則蠹。是不材之木也。無所可用。故能若是之壽。

『莊子』山木篇。空舟であればぶつかつてこられても誰も怒らない、自分を虚ろにすれば誰からも害されないと教えた故事。

方舟而濟於河、有虚船來觸舟。雖有偏心之人不怒。有一人在其上則呼張歛之。一呼而不聞、再呼而不聞、於是三呼邪、則必以惡聲隨之。向也不怒而今也怒。向也虚而今也實。人能虚己以遊世、其孰能害之。

(25)

小隱隱陵藪、大隱隱朝市。伯夷竄首陽、老聃伏柱史。昔在太平時、亦有巢居子。今雖盛明世、能無中林士。放神青雲外、絕迹窮山裏。鷓鴣先晨鳴、哀風迎夜起。凝霜凋朱顏、寒泉傷玉趾。周才信衆人、偏智任諸已。推分得天和、矯性失至理。歸來安所期、與物齊終始。(『文選』卷二十三)

(26)

江路西南永、歸流東北驚。天際識歸舟、雲中辨江樹。旅思倦搖搖、孤游昔已屢。既懽懷祿情、復協滄洲趣。鸞塵自茲隔、賞心於此遇。雖無玄豹姿、終隱南山霧。(『文選』卷二十七)